軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 61

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

“北京装蹄技術研修を終えて”

昨年に続き、６月25日～28日まで、公益社団法人ジャパン・スタッドブック・インターナショナルが主催する中国・北京への競馬に関する技術交流促進事業の一環として行われた「装蹄技術現地研修」の講師として北京に派遣され、研修を実施しましたので、その内容を紹介します。

１．受講者　合計25名

内モンゴル・オインク族自治旗馬業協会ウルチム氏、中国馬業協会獣医李平歳氏、北京馬術運動協会関係者等

２．講演内容

（１）座学

研修場所は異なっているものの昨年９月にも北京研修を実施しており、その経験を踏まえて、「装蹄の基本的な考え方」と題して、脊椎動物のツメの形から始まり、敷料汚染と蹄の異常、装蹄の目的、歩様や肢勢の見方、異常肢勢、蹄機作用の必要性や蹄の変化、浅・深屈腱の主な働き、蹄葉炎や蟻洞の装蹄療法、蹄骨と蹄鞘の位置、最後に装蹄方針の立て方等、これら装蹄に関する基本的知識について、中国語に翻訳したスライド39項目にわたり解説しました。

（２）実演及び実習

昨年は、火炉や工具を現地で調達できずに、削蹄実習のみとなってしまいましたが、今回は、牧場お抱えの装蹄師から装蹄工具一式を借用して装蹄実演及び実習を行うことができました。

実演用馬はモンゴル馬の雑種で、この馬を使って歩様、肢勢、疾病および特徴を確認し、装蹄方針を一通り説明してから実馬装蹄を実演しました。削蹄では、挙肢検査の方法、負面・白帯・蹄支の意義や削り方、蹄鉄修整では、鉄頭部の下狭、剰縁・剰尾について説明しながら作業を行いました。参加者からも実習希望者を募り、結果的に４名が積極的に作業を行い、その作業中および結果について適宜解説指導しました。

（３）質疑応答

不同蹄の矯正、蟻洞の消毒方法、当歳馬の削蹄、蹄底の異常、鉄頭部の形、剰縁・剰尾の付設方法、裂蹄の処置法、日本の装蹄師認定資格等々について活発な質問が寄せられ、それらについて適宜、説明・回答しました。

３．おわりに

（１）研修日は、我々の現地到着が交通渋滞で予定より30分遅れたため、30分遅れで講演が始まりました。講演は概ね予定どおりに進められましたが、講演開始時間が遅れたために講演後には質疑応答の時間が十分に取れず、午後の実習後に質疑を受け付けることにしましたが、実際には実演と実習の合間にも多くの質問が個別的に寄せられました。全体的に実習においては自主的に参加して非常に積極的に指導を受けていたことから、中国の現場の技術者にとって、この種の研修が必要とされていることがヒシヒシと伝わってきました。

（２）聞くところによると装蹄技術に習熟した参加者は一部で、参加した中には北京馬術運動協会の関係者もおり、乗馬ズボンを履いた者や速度競馬のジョッキーをしながら、ジョッキー引退後のためにこの研修に参加した者もいるなど、参加者の大多数は装蹄を専業としているようには思えませんでした。

（３）今回の研修を経験しただけで判断することはできませんが、いずれにせよ現地の装蹄事情はまだ未成熟なところもあり、今後はさらに現地の装蹄師の技術レベルや馬術クラブの事情を調査把握し、より効果的で専門的な研修のあり方を模索する必要があると感じました。

最後に、現地の装蹄技術のレベルと反比例して、現地の馬関係者の装蹄技術向上への期待の高さと、そこに向けての取り組みの熱意には頭が下がったことも事実です。なお末尾ながら、それら現地でお世話になった方々とジャパン・スタッドブック・インターナショナルの担当者各位に心から感謝いたします。

座学風景

実習風景